

主体的な学びを促す授業づくり

—「逆向き設計論」を取り入れた単元計画の構想を通して—

竹原市立賀茂川中学校

1 はじめに

学校教育目標を実現するために、「カリキュラム・マネジメント」に努めることが求められている。それは「授業実践」1つをとっても同様である。そこで本研究が注目したのが、G. ウィギンズ・J. マクタイが提唱している「逆向き設計論」である。この「逆向き設計論」では、「①求められている結果を明確にする」、「②承認できる証拠を決定する」、「③学習経験と指導を計画する」、という3段階を踏まえて単元設計をすることが求められる。より具体的には、その単元の「本質的な問い」、「永続的理解」を考え、それらを踏まえた「パフォーマンス課題」を設定することを経て、単元設計を行っていく。

2 実践例

(1) 研究主題

主体的な学びを促す授業づくり —「逆向き設計論」を取り入れた単元計画の構想を通して—

(2) 仮説

「逆向き設計論」の考え方を生かした授業づくりで数学の授業は実際にどう変わるのか？

本研究では、初めて「逆向き設計論」を学んだ教員歴10年のA教諭の授業づくりに焦点を当てる。

「逆向き設計論」を取り入れた学習指導案の作成やその学習指導案の事前協議を通して、「逆向き設計論」のもたらす実際のメリットについて考察していく。

(3) 実践事例

「逆向き設計論」について、①「逆向き設計」の3段階、②「本質的な問い」・「永続的理解」・「パフォーマンス課題（ループリック）」、③「逆向き設計論」導入のメリットについて学び、単元設計・授業実践を行った。授業は、第3学年の2次方程式「解の公式」で実施した。学習指導案の工夫“授業の本質”について事前協議を行い、授業実施後、調査問題を実施し、生徒の変容を調査・分析した。

3 成果と課題

(1) 定着の状況がよい (2) 「式」に対しての見方・考え方の深まり

(3) 指導者の「数学観・指導観」の深まり

4 おわりに

今後も、先を見通した授業づくり、縦や横のつながりを意識した授業づくりをするために、具体的な指導方法も含め研究を進めていきたい。

【参考文献】

奥村好美、西岡加名恵（2020）、「『逆向き設計』実践ガイドブック『理解をもたらしカリキュラム設計』を読む・活かす・共有する」、日本標準

神原一之（2020）、「数学教育における『逆向き設計論』による単元構想の意義」、岩崎秀樹 編著、「数学教育研究の地平 3 章 4（pp. 255-269）」、ミネルヴァ書房